

この広い世界で

絵 作

赤い死神
みねづか古都

目次

プロローグ 桜舞う ～焦がれ憧れ散る桜～

第一話 春 ～それは出会いと始まりの季節～

EPISODE 宮子1

1

2

13

プロローグ 桜舞う　く焦がれ憧れ散る桜

俺の住む国には、春夏秋冬という四つの季節がある。

北風に身を震わせ、降り積もる雪で世界が白銀に染まる、冬。

南天に昇る太陽から、カラツとした強い陽射しを受け、人々が活気に満ちる、夏。

木を山を埋め尽くす紅葉と秋風の心地よい、心豊かなる、秋。

そして、

桜舞う　春。

始まりと終わり、出会いと別れの季節。

散りゆく桜は、始まりと出会いを祝福するように美しく咲き誇り、

また、終わりと別れを嘆くように、そよ風にその身を削り、散っていく。

そんな桜にちよつとした逸話があった。

桜の木の下には死体が埋まっている。その血を吸っているから、桜の花は赤みを帯びている、という話だ。

実話なのか、それとも都市伝説なのか、俺は知らない。

事實はどうあれ、その使われ方はどちらかと都市伝説の方に近いだろう。バラに刺があるみたいに、美しく咲き誇る桜が実は人の血を吸って生きている、なんてオカルトチックでいいじゃないか。人によっては、少し桜の木が不気味に見えてくるかもしれない。

ただ、俺はそうは思わない。

桜の木の下に死体なんてあるわけない、という意味じゃない。死体の血を吸えるわけがないじゃないか、なんてツッコミを入れるつもりはない。

そうじゃなくて、俺は別にいいと思うんだ。桜の木の下に死体が埋まっていたって。桜がその血を吸って花を咲かせたって。

だってさ、例えばこうは考えられないか？

桜は墓碑なんだ。精一杯生きて、そして死んでいった人の。

人生山あり谷ありで、倒れて眠った人に、そっと寄り添うように。その人の生きた証を無くさないように、血を吸って、花を咲かせるんだ。その人の、苦勞も涙も悲しみも、幸せも楽しさも嬉しさも、全部、全部全部吸って、花を咲かせるんだ。

だから、桜は綺麗なんだ。

散っていく花びら一枚一枚に、その人の一生が詰め込まれているんだ。それが、美しくないはずがない。醜く見えるはずがない。

……なんて、妄想もいいところだな。

実際にそんな風にして桜が咲くなら、この国は今頃桜でいっぱいだ。

たださっきのが、俺の妄想だとしても、春に咲く桜が綺麗なのは、言わずもがなだ。

俺はそんな桜が好きで、

できるなら俺は、

そんな桜みたいに生きたいんだ。

第一話 春 ～それは出会いと始まりの季節～

昔の人は実にいい言葉を残した物だと思つ。

春眠暁を覚えず

春の眠りは凄く心地いいから、ついつい寝過ぎてしまつて意味だ。

裏を返せばこれは、春は寝心地がいいから、ついつうっかり居眠りしてしまつても仕方がないという意味でもある。

こう、記憶の中では教室で授業を受けていたはずなんだが、気がつけば目の前は真っ暗で、耳を澄ませば自分の寢息が聞こえてくるなんてのも、仕方のないことだ。うん、仕方ない仕方が

ドスンッ

「……たあ?」

一瞬、浮遊感を覚えてすぐ、ケツに鈍痛が走った。眠っていたはずの意識は一気に覚醒させられて、俺は訳がわからないまま……

「よっ、お目覚めか?」

俺を見下ろす友人の姿を目にしていた。

「健一か……つてて……」

打ったケツを撫でながら、ゆっくりと立ち上がって周りを見る。「こは俺の通う香田多高、2 Dの教室だ。ついさっきまで俺は授業を受けていたはずなんだが、どうやら今は休み時間らしい。席を立ったクラスメイトがちらほらと見える。

「まったく、随分とよく寝ていたな。化学の木村がえらく立腹していたぞ」

「あ、ああ……そついや、さっきの時間は化学だったな。ところで健一、一つ聞いていいか?」

「駄目だ」

キヤッチボールのつもりで投げたボールを、グローブで取らずにバットで打ち返す。

俺の友人である中田健一はそんな男だ。返ってくるボールは無視して、新しい球を健一に投げ返す。

「俺はどつして教室の床に尻餅をついてるんだ?」

「大方寝惚けて椅子から転げ落ちたんじゃないか?」

「そうか、そうとも考えられるな。ところでもう一つ聞いてもいいか? どつしてお前が俺の椅子を持つてるんだ?」

「ん? ああ、これはな、お前があんまりにも気持ちよさそつに眠っていたからだな、起こすのも悪いと思つて椅子をそつと抜かせてもらったんだ」

「言動と行動が一致してないような気がするの俺だけだろつつか?」

「気にするな、些細なことだ」

「そつだな。俺がケツを打つただけだからな」

はっはっは。

「つて、お前が原因かこの野郎」

「ああそつだとも。何か文句でもあるか?」

開き直るところか堂々と胸を張る健一。悪びれる様子はなく、眼鏡の奥に見える瞳が笑っていた。

「大ありだ！ 一体何の権限があつて、俺の睡眠を邪魔したんだよ！ 折角気持ちよく眠つてたんだぞ！」

「権限か……そうだな、強いて言うなら、一生徒会長として、授業をサボって居眠りに耽る生徒を見逃すことはできなかった、というのがはじつだろうか？」

なるほど。確かに生徒会長として、間違つた生徒に注意を促すのはわからない話でもない。わからないでもないが……

「本音は？」

「人が退屈極まりない授業を真面目に聞いているフリしてるといふのに、気持ちよきそつに寝ているお前に何かムカついた」

「思いつきり私怨かよ！」

「私怨で何が悪い！ いいか、思い浮かべてみる。真面目に授業を受けている自分の隣で寝息を立てる奴がいてみる、ちょっと『センサー、稜樹君が寝てます』って告げ口したくもなるだろ！」

「つて、お前がチクツたのかよ！」

なんて奴だ！ そこは友達ならむしろ、教師に見つかからないようにかばってくれるところだろ！ もしくは、急に指名されて混乱している俺に、そつと問題と答えを呟いてくれるとか！

「生徒会長たる物、教師陣に協力は惜しまないさ。内心も欲しいしな」

「くろつ！ 黒いぞ生徒会長！」

「大体、こつちが毎夜遅くまでお前のために色々をやっているといふのに、その隣でぐすか寝るとは何様だ！ 睡眠不足で生徒会の活動に影響が出たらどうしてくれる！」

「逆ギレかよ！」

大体、俺のためにとか言つてる割に、殊勝な様が僅かたりとも見られないのはいかがなものか！

「つてかお前、それ以前に生徒会長の仕事全然やってないだろ？ ロッキーに押しつけてばっかりで、全然仕事してないって賣子がばやいてたぞ」

ロッキーというのは、俺、というより健一の友人で、運悪く健一と仲良くなつてしまつたせいで、色々と振り回され、無理矢理生徒会長副会長にさせられるといふ、外れクジを引きっぱなしのクラスメイトだ。

ちなみに、ロッキーというのは健一のつけた渾名なのだが、すっかりクラス中、というか学校中に浸透してしまつていたりする。どれぐらい浸透しているかといふと、生徒会のメンバー表に『副会長 ロッキー』なんて記載されているほどだ。

……まあ、やったのは健一だろうが。

「松野の愚痴は今に始まつた事じゃないだろう。気にすることじゃないさ」

「原因の張本人が言つなよ……」

松野 貴子も同じクラスメイトで、生徒会で会計をやっている。腰が重い上に腕と手も重い、全身が鉛でできた生徒会長のせいで、雑務と悩みの種を在庫ができるほど抱えてしまつている苦勞人だ。

「そつやって仕事サボるぐらいなら、何で生徒会長になんて面倒なもんになつたんだよ」「決まつてるだろつ。生徒会室のパソコンから学内のネットワークに侵入してテスト問題を……ゲフンゲフン、その、あれだ、生徒会の予算を横領しようと思つて」

「やっぱり黒いぞ、生徒会長！」「まかしてもまかさなくても真っ黒だ！」「
いいのか、こんなのが生徒会長で？」

「なんや、男二人でさつきから何騒いどるん？」

「聞いてくれよ、遥菜。こいつが生徒会長のくせに黒くて安眠妨害なんだ」

「……意味がわからへん」

声を掛けてきたのは、俺達のクラスメイトであり、友人でもある結城遥菜。子供の頃にこっちの方に越してきたらしく、言葉に少し訛りがあるのが印象的だったが、今ではすっかり慣れてしまう程度には付き合いの長い友人だ。

「っていつか、ウチのこと馴れ馴れしく名前で呼ぶなって、何度言ったらわかんねんな」

「ひでえなあ、俺なりの友好の証だつてのに」

「アンタ、女子は全員名前と呼んどるやん」

「仲良きことは美しきかな」

「アンタのはケツ軽いだけやろ。朱莉っちゆうもんがありながら、一体何人手を出せば気が済むねん」

明朗快活。

遥菜の性格を一言で言えばこんな感じだ。だから女子だけじゃなく、俺達みたいな男子の友達も多い。

それは俺としてもありがたいんだが、根が真面目というか、正義感が強いというか、あまり曲がったことがお気に召さないようで、ことある毎にその辺りを非難してくる。

朱莉と友達だつていうこともあるんだろっけどな。

「何人につて、失礼だな。俺は本気で好きになった相手にしか手は出してないぞ」

「その本気が二人いる時点でもうあかんやろ」

「だから二人が本気で好きなんだよ」

「……はあ。アンタには何言つても無駄やな。毎度の事ながら」

あからさまにため息をついてみせる。遥菜みたいな性格なら、俺みたいな男子はさぞ気に入らないんだろうな。それでも何だかんだいいつつ友達やつていられるのは、朱莉のおかげか。

「相変わらずのプレイボーイぶりだな。ほどほどにしておかないと後ろから刺されるぞ？」「こつちとしても、生徒会の方に」？ Dの遊び人に鉄槌を喰らわせてください」なんて投書が来て困ってるんだが。とりあえず前向きに検討しておく方向になったが」

「政治家答弁つてやつだな」

「いや、後日生徒会会議の場で話し合つことになった」

「ホントに前向きに検討するなよ！」「つてか、お前も止めるよ！」

「残念だが生徒会長がいやに乗り気だな……どうにも止められそつにない」

「生徒会長はお前だろ！」「何他人事みたいに言ってるんだよ！」

「ちなみに現状では、月のない夜に拉致、監禁の後集団リンチという案と、公の場での吊し上げという案が候補に挙がってるんだが、どつちがいいと思つ」

「それを俺に聞くなよ！」「つてか、後者はともかく前者は明らかに犯罪臭漂ってますが」

こいつの場合、冗談じゃなくて本気でやりそうだから怖い。もうそれなりに長い付き合いになるつて言つのに、こいつの言動と行動だけは未だに掴めないことの方が多すぎる。とりあえず、これからは学生らしく暗くなる前に家に帰ることにしよう。

「それがイヤやったら、少しは自粛しいな」
「そりや無理だ。女の子のと仲良くするって言うのは、俺のライフワークだから」
「って言っても、別に男子連中と仲が悪いわけじゃないぞ。男子は男子で健一みたいに仲のいい奴はいる。」

ただ、やつぱりお年頃の学生としては、そっちの方が目立って見えるってだけで、俺も遙菜と同じくらい男女に顔が広かったりする。

そりや妬み嫉みが全くないわけじゃないけど、冷やかしたり、小突かれたり、たまに拳で友情について語りあうくらいで、大した問題じゃない。ああ、大したことないともな。

「ホンマにアンタは……朱莉に愛想尽かされても仕方ない。まっ、ウチはその方がええと思っけど」

言いたいことだけ言って、遙菜は俺達に背を向けて別のクラスメイトのところへと歩いていく。休み時間だけあって教室は賑やかで、遙菜を取り込んだグループは、賑わいが一回り大きくなったような気がした。

ふとぐるりと教室を見回してみれば、休み時間だけあって、クラスメイト達はいくつかのグループに分かれ、仲良しげに話をしている。喧嘩をしている奴もいなければ、言い争っている奴もいない。

「平和だねえ」

世界では戦争だのテロだの飢餓だの、毎日何人も人間が死んでるっていうのに、このシーンを切り取っただけでもわかるように、この国は平和そのものだ。生きていられることが当たり前。何とも贅沢なことじゃないか。

「ふむ、それはつまり俺に騒ぎ起こしてくれと言うパスポートなわけだな」

「……人が折角平和を噛みしめてるってのに、いきなり何を言い出しやがる」

「わかった。近いうちに何かイベントを用意しよう。何、気にするな。こう言うときに使わずして、何のための権力だ」

「いや、俺は何も頼んでないというか、むしろ何もしないで欲しいんだが」

「今すぐ……と言いたいところだが、休み時間だけでは時間が足りんな。とりあえず、松野とロッキーに話だけは通しておくか」

「って、おい、健一。どこ行くんだよ。……って、聞いてないな」

なにやらぶつぶつと呟きながら、健一が席を立つ。顎に当てた手は、あいつが考え事している時の癖だ。またさぞやくだらしない事を真面目に考えているんだらうな。

「やれやれ……まあ、貴子やロッキーがいるなら、大事にはならないうけど……いや待て、あの二人に話を通すって事は、生徒会として何かやるつもりなのか？」

「一体何をしでかすつもりなんだ……？」

少しだけ真面目に考えて、すぐに止める。あいつの考えを見通そうなんて、砂金の山で砂粒を見つけるような物だ。

一人になって、俺はすることもなく窓の外を見ていた。

教室は相変わらず賑やかで、どこかのグループに混ぜてもらったのも悪くないんだが……まあ、何となくだ。

季節は春。

窓の外には、桜が、

俺の大好きな花が、風に揺られて花びらを散らせていた。

「よしっ、昼休みだ。松野、ロッキー。今すぐに生徒会室に直行だ！」

号令が終わるなり、教師が出て行くよりも早く健一がその口にした。呆気にとられるクラスメイト達を置き去りにして、さっさと教室を出て行く。

「まさか……まさか、あの中田君から、率先して生徒会室に行くなんて言葉が聞けるなんて……ようやく私の苦勞が実ったのかしら……」

「あー、うん。そうだといいわ、うん」

感動のあまり泣き出しそうな貴子と、その隣で曖昧な笑みを浮かべるロッキー。前者は言葉を額面通りに捉えていて、後者は健一がまたるくでもないことを考えてるってわかってるんだらう。

何というか、ご愁傷様。

「さてと、俺は昼飯にするかな」

健一をおつて教室を出て行った二人を見送った後、俺は人が半分ほどに減った教室を見回した。今頃さぞや食堂は混んでいることだらう。遥菜を初めとする、食堂、購買組は本当にご苦勞なことだ。

「教室にただ座っているだけで、可愛い彼女がお弁当を持ってきてくれるとは、警沢な奴だなお前は。たまには学食、購買組の苦勞を味わってみたらどうだ？」

「いやいや、そんなことしたら、折角俺のために弁当を作ってくれて二人に申し訳ないだろ……」

聞こえてきた声に振り返れば、待ち人の一人である宮子の姿。

ほどけばそこそこ長そうな髪を団子にして纏めており、女子にしては背が高く、座った俺を見下ろすように立っている。

悪戯っぽい目端と挑戦的に吊り上がった口元。顔立ちは整っていて、誰が見たって紛れもない美人だ。目が悪いらしく、眼鏡を掛けているのだがそれも初めから顔のパーツのであるかのように、自然に馴染んでいるのだから、何とも美人はお得なものだ。

もっとも、一番得しているのはそんな宮子を彼女にしている俺なんだろうけどな。

「二人という割に、美月の姿が見当たらないが？」

「授業が長引いてるんじゃないのか？ 学校には来てるだろうから、すぐに来るだろ……っつて、噂をすれば何とやらだな」

宮子の肩越しに教室の扉を覗くと、今まさに朱莉が教室に入ってきた所だった。

「ごめんなさい。お待たせしまして。少し、授業が長引いてしまって……」

「気になるなって。宮子もさっき来たばかりだし、遅れたって言ったって、まだ昼休みに入って五分も経ってないしな」

むしろ宮子が来るのが早すぎるような気がする。三年の教室は、俺達二年の教室の一つ上の階にあるの。」

宮子の隣に並ぶ朱莉。朱莉は女子の平均的な身長だから、宮子と並ぶと頭一個分ぐらい身長差がある。

その代わりと言つのもなんだけど、髪は宮子より朱莉の方がずっと長い。背中の上りまで伸ばしている朱莉の髪は、黒く艶やかでとても綺麗だ。宮子は美人だけど、朱莉は可愛

いつて感じの顔つきをしている。ニコッと笑えば、普通の男子ならニコッと落ちてしまっ
んじゃないだろうか。

クラスや学年どころか、学校中で割と有名な二人を侍らせる俺は、宮子の言うとおり贅
沢者なんだろうなあ。そう思えば、クラスや廊下からグサグサ刺さってくる嫉妬の視線な
んて痛くも痒くもないとまあ。

「んじゃ、机引っ付けて飯にしよっぜ」

昼休みはいつも食堂に行く健一と選菜の机を借りてきて、三人分のスペースを確保す
る。その上に朱莉の分と宮子の分、そして二人が俺のために作ってくれた弁当の計四
つが広げられる。

「おう、今日もつまそつだな」

「当然だ。この私がわざわざ作ってやったんだからな」

「私も、その……一生懸命頑張りました」

よし、じゃあまずは手堅く宮子の弁当を頂こうじゃないか。

長方形のアルミ弁当に、仕切りで分けられたおかずとご飯。その中で一際目立つのは、
焼き上がりの美しい黄金色の卵焼きだ。まずはこれにしよっ。

「んむ、もぐもぐ……」

柔らかくて甘い。うん、いつもの宮子の卵焼きだな。見た目もさることながら、中身
もよくできてる。惜しいのは、冷めてることぐらいだな。出来立てを食べたら、もっと
うまいだろうなあ。宮子の奴、顔と性格に似合わず料理つまいから。

「そこはかとなく不愉快な感想を抱いているようなので、弁当を下げてやるうと思っの
だ。どうだろうっか？」

「はっはっは、やだなあ八二丁。俺は今こんなつまい卵焼きは他にないって思いながら食
べてるんだぜ？」

嘘はついてないぞ、うん。

「そっか？ ならまあ、そう言いつつにしておいてやるっ」

口元を緩めてフツと笑っ。そう言っ仕事は、なんて言っか健一に似ている。ある意味似
たもの同士だからな、宮子と健一。

「あ、あの、零君。わたしのお弁当も、その……」

「おう。わかってるっ」

さて、次は朱莉の弁当だ。二段重ねの弁当箱は並べて広げられていて、こっちも片方が
ご飯で片方がおかずだ。

……なんつーか、作ってきてもらっとい何だけど、別に二人してご飯用意してくれな
くていいような気がするんだが。

「その、わたしも卵焼き作ってみたんですけど」

「ほっ、この私に真っ向から挑んでくるか」

「日暮先輩には負けてられませんか」

なにやらバチバチと火花が散っているような気がしないでもないが、それは二人に任
せておいて、俺は朱莉の弁当を食べるとしよっ。リクエスト通り、卵焼きから頂くか。

「んむ。もぐもぐ……」

うん。外は綺麗に焼き上がってる。歯を通したときの感触だって悪くはない。
悪くはないんだが……

(んごはっ!)

脳天をハンマーで殴られるような衝撃。よくゲームや漫画なんかで、頭の上に星がクルクルと回るシーンがあるけど、今の俺はそんな感じだ。目の奥がチカチカするぜ……

「ど、どつですか?」

「ああ、もちろんつまいぜ」

ニツと笑って親指を立ててみせる。折角彼女が作ってきてくれた弁当だぜ? 痛い、なんて言えるわけないだろ?」

「いいなあ、美月さんと日暮先輩の手作り弁当……」

「クソツ! 何であいつばっかり!」

教室中の男子からのつらみつらみが聞こえてくる。ああ、同じ男子としてお前達の気持ちがよくわかるぞ。

だがな! ならお前達は朱莉の弁当をつまいと喋って食うことができるのか?!

断言しよう! 絶対に無理だ!

貴様ら俺がこの境地に辿り着くまで一体何度倒れたと思ってる! 朱莉の弁当は、外見はどんどん進化しているのに、味の方は最初からまったく変わってないんだぞ! しかも本人が食べても、何故かおいしいと感ぜられてしまっ代物だ。つまり、この味は一向に変わることはない。

羨ましいというなら、問おう! お前達にこれから未来に掛けてこの料理を食べ続けることができるのか?!

そんなもの、無理に決まっている! 朱莉の料理が食べて笑っていられるのは、何度も何度も食べて抗体ができてしまっている俺ぐらいなのだ!

は! はっ! はっ! はっ!

………はあ。

「よかった。どんどん食べてくださいな」

「おう。任せとけ」

致死量を超えない程度に頑張ろう。

「美月の方もいいが、私の方もちゃんと食べてくれよ。残したら明日から弁当は抜きだからな」

「もちろんいただきますとも」

さすがに朱莉の弁当だけじゃ腹が持たないからな。………いろんな意味で。

宮子の弁当と朱莉の弁当。まさに天国と地獄を行き来しながら、俺は昼休みを平穩に……

まあ、平穩に過ごしたのだった。

「はあ………中田君を信じた私が馬鹿だったわ」

「あはははは………」

関係ないが、昼休みが終わる頃に教室に帰ってきたロッキーと松野は、また随分と疲れた顔をしていたのは、まあ大方の予想通りだな。

「やつべ、ちょっと遅くなったな」

学校が終わって迎えた放課後。

HRが終わるなり教室にやってきた宮子と朱莉に連れられて遊び回っていたら、すっかり遅い時間になってしまった。

空はもう星が浮かんで……って程じゃないが、日は沈み、その残滓が照らす空は群青の闇が塗り固めるように、茜を空の端へと追いやっている。もう少ししたら、街を照らす街灯がつく頃だ。周りを見れば、帰宅途中の学生は俺ぐらいなものだった。……ちなみに、月が出ています。

どうせ家に帰っても親父達はいないだろうから、急ぐ必要なんてないんだが……ってか、別にいたって同じか。研究者だかなんだか知らねえけど、しょっちゅう家を空けてるあの二人に怒られる謂われはないわな。

それでも足が勝手に早く動くのは、

「ただいま」

と、挨拶する相手が家にいるからだ。

玄関は暗く、だがすぐ隣の居間からは光が漏れている。

「……帰ったか」

居間へと続く扉を開けて、一樹が俺を出迎える。

稜樹一樹。俺の同い年の兄だ。容姿はそれなりに似てるものの、中身はまるで正反対。

冷静沈着。頭脳明晰。

なんて言葉がしっくり来るような奴だから、そりゃ俺とは似ても似つかないともぞ。ちよつとクールすぎて友達が少ない、なんて辺りも俺とは真逆だ。

「夕飯は居間に用意してある」

「ん、サンキョ。ありがたかったですよ」

「……食後にちゃんと薬を飲めよ」

「わかってるって。ガキじゃないんだから薬を嫌がったりしないって」

「……そうか」

短くそう言っつて、一樹は眼鏡のスレを直す。右目を隠すように長く伸びた髪が眼鏡に触れて、少しだけ揺れた。

「……じゃあな」

階段を上っていく一樹を見送って、俺は居間に移動する。テーブルの上には一樹が作ってくれた夕飯にラップが掛けられていた。

上から触ってみるが、熱はもうなく、すっかり冷めてしまっている。

「あっちゃあ……やつべちよつと遅かったか。あいつら、なかなか離してくれないんだもんな」

それはそれで幸せなことなんだが、折角作ってくれた飯がすっかり冷めてしまっているのは、一樹に悪い。つっても、あいつはそんなこと気にしないだろうっけぞ。

むしろ、「冷めているなら作り直そう」「なんて言い出しそつだ。

「面倒見がいいというか、何というか……」

不器用な奴だよ、全く。

「俺はもう全然気にしちゃいないってのにな……」

むしろ、あいつが俺を嫌ったっておかしくないだろうっけ。

本当に不器用な奴だ。

「……うまいな」

何となく、特に意味なんてなかったけど、

俺は冷めてしまったハンバーグを口にして、そう呟いた。

晩飯を食い終わって、俺は部屋に戻るなりパソコンを起動する。ゆっくりとOSが立ち上がり、デスクトップ画面が表示されると、いくつか並ぶアイコンの群れから一つのアイコンをクリックした。

Farthest Island

モニターの中に新しいウィンドウが開いて、その文字が大きく表示される。インターネットを使つての多人数同時参加型オンラインRPG。いわゆるネットゲームという奴だ。中二の時から始めて、今年でもつ三年目。ゲーム内では結構有名なプレイヤーだったりする。

「さてと、今日もお楽しみの時間がやってきましたよ、つと」

個人識別用のIDとパスワードを入力してしばらく待つと、小さなモニターの中に大きな街並みが現れる。中世ヨーロッパを彷彿させるような街並み。煉瓦でできた家々と、街中に敷かれた石畳。遠くにはご立派な城まであるときたもんだ。

最近のゲームはなかなか馬鹿にできなくて、空も緑も山も海も、まるで本物みたいに凄く綺麗に作られている。自分の分身であるキャラクターは、本当にもう一つの世界にいるように感じられるぐらいなのだから、大した物だ。

街中には沢山のキャラクター達が走り回っている。これも全て俺と同じように誰かが操っているのだ。家にいながら、沢山の人と共にゲームをすることができる。それがネットゲームの楽しさだ。少なくとも、俺にとっては。

俺が今居る場所はこのゲームでの首都、エスペリアと呼ばれる城下町だ。首都つてだけあってキャラクターの人の数は多く、探せば多分知り合いが一人二人いるんじゃないだろうか。とはいえ、モニターを埋め尽くすような人波の中で、わざわざいるかもわからない友人を捜すつもりは毛頭ない。

そんなわけで街を出ていくと、そこはまた別世界が広がっている。

目一杯広がる草原の縁。遙か彼方まで続く空の蒼と、それを彩るような雲の白。遠くにはうつすらと映る山々。そして目の前には、モンスターにやられて倒れる長耳の少女。「つて、おい」

街を出れば、そこはもうモンスターの蔓延る危険な世界……つてなわけで、街を出るとモンスターに襲われ、そのモンスターを倒すことによってゲーム内での通貨を得たり、自分のキャラクターを強くしたりするんだが、目の前の少女はそのモンスターにやられてしまったらしい。

加えて言うと、自分のキャラクターを作るとき、いくつか種族を選択することができる。俺のキャラクターはヒューマン、つまり俺達人間と同じ容姿をしたキャラクターだ。少女の種族は、耳の長さが特徴的なエルフだった。

大丈夫か？ 今起こしてやるからな。 リザレクション！

倒れたキャラクターに向かってアイテムを使い、立ち上がらせる。

モンスターに倒されたキャラクターはアイテムを使うことによって蘇らせることができるのだが……少女は何が起こったのかわかっていないのか、何も言わずに いや、チャットで会話しているから打たずに？ その場に立っただまま静止したままだ。

あー、もしかして初心者だったりする？ えーと、Kasumiちゃん？

キャラクターの上には、ハンドルネーム ネット上で使う便宜的な名前のことだ
が表示されている。俺のキャラクターの上にZer〇って表示されてるよつた。

何？ アンタ？ 馴れ馴れしく呼ばないでよ

話してくれたと思ったら、何とも刺々しい態度だ。

……いいね。

自分でも口元が弛んだのがわかった。

んじゃ、初めまして。俺Zer〇って言うんだ。これでもこの世界じゃ結構名の知れた
プレイヤーなんだぜ。君初心者なんだろ？ よかったら俺が色々手伝ってやるっか？

はあ？ いきなり何よ？ ナンパ？

いやいや、純粹に初心者さんのお手伝いをしたいなって思ったただけだって

別にいいわよ。アタシはアンタみたいに、このゲームをするつもりなんてないんだか

ら

ん？ それってどっついつ意味…

アンタに言う必要なんてないでしょ

何とも素っ気ないお言葉。

……そんなに、冷たく突き放されると、逆に燃え上がって来るじゃないか。

なんて思ってる間に、Kasumiちゃんはどこかに行っつとして……さっき倒された
モンスターに、もう一度倒されてしまっていた。

もしかして、敵との戦い方もわからないのか……？

あー……やっぱり、手伝っつて。なんっつか、見てられないし

っつ、つるさいー！ 見てられないっつて言っつなら、どっかいけばいいでしょー！

いやほら、ここで会ったのも何かの縁っつーかなんっつーか……なあ？

こんなの見たら放っておけないだろ？

しょうがないでしょ、ゲームなんてやるの、これが初めてなんだから！ ……もっいい

！ 今日ほこれで終わりにすっ

っつ、あ、おっ

呼び止める間もなく、Kasumiちゃんのキャラクターは光に包まれて消えてしま
う。どっやらゲームを終了 ログアウトしてしまっつたらしい。あの調子じゃ、多分今日
は戻ってこないだろっつなあ。

「やれやれ……どっすっつかね」

両手を頭の後ろで組んで、俺は椅子にもたれかかる。このまま何事もなかったみたいに
冒険に出かけてもいいんだけど……

「なーんか、気になるよなあ」

あのツレナイ態度はもちろん、ゲームをやったことないとか言っつたのに、何でいきな
りネットゲームを始めたのかとか。

「まっ、特にすることもないし、いいか」

俺もKasumiちゃんと同じようにゲームからログアウトして、パソコンの電源を
落とす。

今日はもう戻ってこないだろっつから、な。

EPISODE 宮子1

稜樹零 中学二年 夏

「……クソッ！」

真昼の太陽と同じ位置に月が浮かぶ頃。人気がない路地裏の壁に背を持たれた俺は、吐き出す先のない苛立ちを拳に乗せ、乱暴に壁を叩いた。

コンクリートでできた壁が、俺一人の力で崩れるはずもなく、怒りは発散されることもなく、ただ手が痛くなっただけ。

……そんな行為を何度も何度も繰り返せば、手の皮がめくれ、赤い血がポタポタと路上に斑点を作っけてもおかしくはない。ただの現実だ。

「クソッ！」

また意味もなく同じ行動を繰り返して、痛みに眉を顰める。

いや、痛いのは手だけじゃない。こんな時間に、こんな場所に居るんだ。柄の悪い連中に絡まれるのなんて日常茶飯事で、俺はそれを求めてここに居るんだ。どうしようもない苛立ちをぶつけても胸が痛むことのない相手を求めて。もう何日も、家に帰ることもなしに俺はこの辺りをうろついていた。

……いや、それも違うか。家に帰りたくないから、俺はここをずっとうろついて居るんだ。

幸い今は夏で、外で寝たって風邪を引くようなことはないし、飯はその辺をうろついてる奴から財布を奪えば、いくらだって手に入れられる。顔中、体中痣だらけで、手はこんな有様だから、コンビニに行けば店員が泡食ったような顔をするのだけのがちょっと面倒だが。

「なんで……何で俺がこんな事してなきゃならねんだよ！」

別に誰かに強要されたわけじゃない。思春期特有の不安定な状態にあるわけでもない。今の俺が不安定な状態にあることは間違いないだろうけどな。

わかってる。ああ、わかってるぞ。

親父達は俺を責めないだろうよ。俺が帰れば当たり前のように出迎えてくれるだろうよ。けど！ そうやって俺はあの家に帰って、死ぬまであいつらの実験動物(モルモット)やってないといけないのかよ！ そんなの、死んでも御免だ。

それに……

「一樹にも、あんなことしちゃまって……」

あいつが悪いわけじゃないのに。みっともなく取り乱して、あんな……

「あんな事しておいて、のこのこと帰れるわけじゃないじゃねえか……」

なあ、俺は一体誰を恨めばいいんだ？

親父達か？

一樹か？

それとも、暴走した過去の自分か？

誰か教えてくれよ！

誰を恨んだら、俺は前みたいな毎日を送れるんだよ！ なあ！

「また随分と死んだ顔をしているな、少年」

声を掛けられて、俺はハッと顔を上げた。ここ数日で俺がぶちのめした連中かと思っ
た。

だが、見上げてみればそこにいたのは敵つい男じゃなくて、すらりとした長身の、こん
な闇の世界に似つかわしくない、思わず息を呑むような美人だった。

「何だよ、あんた……………」

繰り返すが、ここは街に隠れるように存在する路地裏だ。表通りからは遠く離れ、街
灯の光すら届かない。遠くに見える表通りの光が別世界に見えるような暗い世界に、何で
こんな女がいる？ 入れた様子もない、外見と同じように中身まで穢れない、まじう事な
き表の住人が、何でこんな所に不用心に立っているんだ？

「私か？ 私は日暮宮子ひぐりみやこだ。お前は？」

「俺は名前を聞いたんじゃねえよ。何でアンタみたいな奴がこんな」

「少年。私は名乗ったんだ。お前も名乗るのが礼儀だとは思わないか？」

自分で言うのも何だが、今の俺は普通の女子が見たら悲鳴を上げて逃げ出すようなナ
リをしている。それでなくなっただけでこんな場所であむろしてる相手を見たら、身の危険を感
じるだろう。女子なら尚更だ。

だっていうのに、何でこの女は平然と、物怖じせず俺に向かってそんな口を叩けるん
だ？ 大体こんな場所で礼儀なんて場違いにも程があるぞ。

「ん？ どうした？ まさか自分の名前を忘れたとでも言うつもりか？」

「……………んなわけあるかよ」

「だったらさっさと名乗れ。いつまで私を待たせるつもりだ？」

「偉そうにいいやがって。何様のつもりだよ」

「もちろん、私様のつもりだ」

本当になんなんだ、この女は。

行動も言動も、存在すら理解できない。

「……………やれやれ。随分と警戒されているようだ。別に名乗るべからいでどうだっていいわ
けもないだろうに。そんなに私が怖いかな？」

「馬鹿言つな。お前の方こそ、俺が怖くないのかよ。こんな場所に一人でのこのこやって
きて、俺がその気になったらどうなるかわかってんだろ？」

「ほう、おもしろい。一体どうなると言うんだ？ 私に教えてくれないか？」

余裕たつぷりの笑みを浮かべて、女は俺を目線でも立ち位置からも見下ろしてくる。

「お前を押し倒して、その……………い、いろいろするんだよ。いろいろ……………」

「ほう、いろいろねえ。よつするに私の同意なしに性交渉……………もっと直接的に言つたら
セックスを行なうと言いたいわけだな」

「ぶっ!!」

セ、セックスって……………何でそんな単語がすんなり出てくるんだよ！ こいつホントに女
か？

「やれやれ、言葉だけでそんなに赤面するとはな。予想以上の純情ボーイだな。お前は」

「なっ、だ、誰が！」

「ぶむ……………」

「な、何だよ、人のことをジロジロと……………」

品定めするよつに頭の天辺から足のつま先まで、目をせわしなく動かす女。見られてる

「うちは居心地悪いところの上ない。」

「……よし、まあいいだろう。見てくれは悪くないし、何より面白い。お前に決定だ。喜べ、少年」

「はあ？ 何の話だよ」

「お前は私に選ばれたんだよ、少年。さあ、ついてこい。温かい飯がお前を待っているぞ」
「なっ、ちよ、おい」

俺の腕を掴むなり、女は表通りに向かって歩いていく。

「な、なんだ、こいつ？ いくら体がもうポロポロだからって、腕を振りほどけないなんて、どんな握力してるんだ？」

「おい！ 何のつもりだよ」

「だから言っただろう。お前に温かい飯を用意してやるんだよ」

「誰がそんなの欲しいって言った」

「お前の心が私に語りかけてきたのさ。『宮子様……ご飯が食べたいです……』とな」

「言ってねえよ！ 勝手に捏造すんな」

「はっはっは。細かいことは気にするな。こんな美人がお前のためにわざわざ飯を作ってやるうというのだ。ありがたく思えよ」

「自分で美人とか言っちなよ」

「ん？ 何だ？ お前の目に私は美人に見えないというのか？」

立ち止まって、俺の目を見てそう訊ねてくる。

そうなるに自然に俺の視界にも女の顔が映るわけで

「ふむ。実にわかりやすい反応をありがとう」

「くっ……」

自分でも顔が熱くなってるのがわかる。何も言い返せない。

「ふふっ。素直になれば、腕くらいなら組んでやるぞ」

「だ、誰が」

「ふむ。残念だ」

「つてか、離せよ！ おい」

俺がいくら叫んでも、女は俺の手を離さない。むしろ、痛いぐらいに力が込めてくる。

路地裏と違って表通りは当り前のように人が多い。そいつらに一体俺達がどんな風に見られているのか。……あんまり考えたくはないな。

「……おい。俺をどこに連れて行くつもりだ」

いい加減逃げることを諦めて、俺は女にそう訊ねる。女は不敵な顔をして言った。

「決まっているだろう。私の家だよ、少年」